

岡山県大学図書館協議会平成 22 年度第一回研修会報告書

1. 開催日時：平成 22 年 11 月 9 日（火） 13:30～15:50
2. 場 所：新見市学術交流センター3F 交流ホール
3. 参 加 者：県内 16 大学・短大 24 名
4. 司 会：浅野 智子（岡山県立大学附属図書館）
5. 書 記：江澤 景子（吉備国際大学短期大学部附属図書館）
水溜友紀子（就実大学・就実短期大学図書館）
6. 内 容：リポジトリについて、基礎知識を身につけるとともに、実際の実践の方法について学ぶ。また、公共施設と大学施設と両方の機能を併せ持つ図書館を見学することで、地域の中でどのような役割を果たしているのかを学ぶ。

(1) 開会

新見公立大学・新見公立短期大学学長 難波正義氏より開会の挨拶があった。

(2) 講演：「1 時間でわかるリポジトリ」～基礎知識、そして実践へ～

講師：竹下啓行氏（岡山大学附属図書館情報管理課）

① 教養編：リポジトリとは何か。その成立と発展、現状について

機関リポジトリとは、大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信のための事業である。

リポジトリ（アプリケーション）は、背後のデータベースに格納されたメタデータ（書誌情報）と本文ファイル（PDF ファイル）を効率よく見せるしくみであり、OAI-PMH というルールに準拠して、OAI（Open Archives Initiative）に登録することで正式なリポジトリとして認められるものである。この仕組みを利用すると、世界中にデータが広がり閲覧しやすくなり、可視性が向上するという利点がある。

リポジトリの成立の背景には、学術雑誌の価格高騰によるシリアルズクライシス、それに対抗するオープンアクセス運動がある。また、日本での発展の背景には、NII の CSI 委託事業（H17 年度～）によって、多くの大学が資金を得ることができたことがあげられる。国内の現況として、コンテンツ数の半数以上は自機関内の研究成果（紀要論文）の公開となっている。これは、著作権処理が容易なことと、機関リポジトリが大学の研究成果の情報公開とそれにおける社会貢献を重要視しているためである。

② 実践編：リポジトリをつくる前に。つくる。つくったら。

リポジトリをつくるにあたっての必須事項は、リポジトリをつくる動機と、学内合意の形成である。リポジトリは、図書館が研究成果を預かり発信の代行をしているという観点から、図書館の事業ではなく大学の事業であると考えられ、学内合意の形成が重要となるのである。

作業としては、サーバ、アプリケーションの調達、データフォーマットの決定、コンテンツの収集、その登録という手順でおこなわれ、リポジトリ作成後は、OAI-PMH に準拠し OAI のデータプロバイダのリストに登録することで、リポジトリとして認知され、世界中からハーベストを受ける用件が整うこととなる。さらにクロール、ハーベストへの申込みや、ディレクトリ関係の登録を行い、視認性をあげることで、自機関のリポジトリを広く世間に認知してもらうことが可能となる。

また、リポジトリにおいて重要なことは、学内の研究成果を集めてその発信の代行をしている以上、それを永久に維持・継続し、コンテンツを収集し続けることである。

③ 結語： 大学図書館にとっての機関リポジトリ

リポジトリは図書館の仕事ではない。研究者の研究成果を公開する、純然たる新規事業である。研究者の情報発信を支援し学術情報流通全般に寄与していくものである。

純然たる新規事業のため、予算や人員の投資が必要となり難しい面があるが、別部署との連携や外部資金を得るなどの適切な方法で資金を得ることが大切である。

貢献の対象として、図書館利用者だけでなく、大学全体、大学の研究者、社会、地域の方にも貢献できる事業であることから、今までどおりではなく、新しい事業を行い、大学や地域、社会に貢献したいときには最適な事業であり、情報発信の担い手として次のステップに向かうには非常に価値のある事業である。

④ 質疑応答

Q. リポジトリ導入により、様々なメリットが生まれると思うが、逆にデメリットがあるとすれば、どのようなことがあるか。

A. 研究情報を生産、発信していく場として、大学関係者にとってはデメリットはない。あり得るとすれば、コスト面だけである。

あとは、著作物の中身についてのクレームがくることがある。(間違った情報が載っている、引用の範囲を超えた転載がある、誹謗中傷がある 等)

これについては、どういう理念で運用しているかなど運営指針を明文化する、公開されたもの(フィルターを通ったもの)を掲載するなどの対応を行うことが大切である。

Q. 学内刊行物以外の論文の収集方法について、何か有力な収集方法・方策はあるか。

A. 特にはない。本来は放っておいても論文が集まってくるように、事業そのものの認知度・理解度を上げていくといった啓発活動のようなことはしないといけないが、実際には紀要論文以外にはなかなか集まらない、苦勞しているところである。リポジトリの理解度が高くない状況では、どういう方法を使用しても、コンテンツ収集は非常に手間がかかる作業である。

(3) 新見公立大学附属図書館見学 ～地域と寄り添う～

新見公立大学附属図書館職員の方の説明を受けながら、館内及び学術交流センターの見学を行った。その後、交流ホールにて、新見公立大学附属図書館小川氏より、センターの概要・設立の経緯、図書館の機能について資料に沿って説明がなされた。

施設概要

平成 20 年 4 月に新見市学術交流センターが建築され、その 1 階と 2 階に移設されたのが新見公立大学附属図書館である。一般市民に広く開放し、大学・短期大学の学科の専門資料を中心に広く市民の学習研究活動を支援するという公共図書館の面も併せ持つ図書館となっている。また、3 階は研修室と交流ホール、にいみ子育てカレッジが開催されているプレイルームがあり、研修機能を持つ地域に開放された施設となっている。

特徴

- ・新見市学術交流センター図書館及び新見公立大学附属図書館の2つの名称をもっている。
- ・ICタグを利用した貸出返却・リライトカード（利用者カード）の利用・タッチパネルによる自動貸出システムといった最新の設備を整えている。
- ・新見市内の公共図書館5館との相互協力を実施し、横断検索により相互に貸出・予約を行っている。資料は新見図書館の移動図書館車で運送されるので、通常よりも到着が早く、利用者の利便性に役立っている。
- ・絵本コーナー（ねころんぼコーナー）の充実化、親子連れも気兼ねなく読めるようにマットを敷き、利用しやすくしている。
- ・選書ツアーや私の読書ノートコーナー（教員推薦図書コーナー）、テーマを決めてフリースークを行うライブラリートーク（毎月開催：ゲストは学長先生）など、図書館企画を豊富に実施し、利用率の向上を図っている。

質疑応答

- Q. ねころんぼコーナーを利用する子どもたちの声が気になると思うが、学内利用者の反応はどうか。
- A. 静かではないが、学生等も理解しており、保護者も図書館ということで、気をつけてくれるので問題になることはない。
- Q. 学術交流センター図書館として運用しているメリット・デメリットは何か。
- A. メリットは、公共図書館の側面を持っていることで、新見市内の公共図書館との協力体制が整っていることである。デメリットは特にない。
- Q. 今後どのような図書館を目指しているのか。
- A. 学生の学習とその環境を保障する大学図書館を目指している。そのために専門図書の充実や未導入の電子図書やリポジトリの導入が今後の大きな課題だと考えている。また、公共図書館としては、専門分野を地域に還元する、一般利用者が利用しやすい地域みんなの図書館を目指していきたい。

(4) 閉会

新見公立大学附属図書館長 逸見英枝氏より閉会の挨拶があった。

以上